

機関番号：34101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520186

研究課題名（和文） 近世における風土記受容の総合的研究

研究課題名（英文）

A Synthetic Research of the "FUDOKI" Reception in the Early Modern Times

研究代表者

橋本 雅之 (HASHIMOTO MASAYUKI)

皇學館大学・現代日本社会学部・教授

研究者番号：70164796

研究成果の概要（和文）：風土記は、従来の研究では近世期において二次的資料として取り扱われてきたと考えられてきた。本研究は、そのような通説に対して、古典テキストへの引用件数という新たな視点を導入して、その妥当性を検証し、風土記受容の実態解明を試みた。その結果、特に近世後期においては、この資料の独自の価値が認められていたことが明確になった。そこに本研究の意義がある。

研究成果の概要（英文）：

They (FUDOKI) were thought to have been dealt with as the secondary materials in the early modern term by the usual research. A new point of view was introduced to such a popular view of the number of quotation matters to the classical textbook, and that validity was verified, and this research tried the actual condition elucidation of they (FUDOKI) reception. As for the early modern latter term, it specially became definite that the individual value of these materials was admitted as that result. There is meaning of this research.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：古代文学

1. 研究開始当初の背景

風土記の受容に関する研究は、これまで活発とは言えなかった。その理由は、風土記が上代文学研究の資料として「二次的資料」として位置づけられてきたことと無関係ではない。この位置づけは秋本吉郎によるもの（『風

土記の研究』）であり、それが風土記研究の枠組みを限定してきたと言える。そのため、当該分野の研究は停滞を余儀なくされてきたというのが実情である。

2. 研究の目的

本研究は、近世における風土記受容の実態に

ついで写本・版本を中心に調査をおこないその具体的な有り様を明らかにすることを目的とする。研究の対象は、五風土記と呼ばれている常陸国風土記・播磨国風土記・出雲国風土記・肥前国風土記・豊後国風土記であり、それらに関して時代的背景や文化的要請といった事情を考慮に入れながら、「風土記再発見の時代」と呼ばれる近世での受容の実態を解明する。本研究では、特に以下の点を明確にしたいと考える。▼(1)それぞれの地方における資料の残存状況の確認と基本目録の作成。▼(2)それぞれの地方における受容の実態について何が重視されているかを、書誌学・注釈学・地誌学などの視点から分析し、各地方における受容の特色を明らかにする。その際、風土記資料の残存状況に鑑み、他地方の文庫・図書館(例、京都市賀茂別雷神社三手文庫など)の調査も視野に入れる。▼(3)調査結果を整理統合し「近世風土記関連資料データベース」として研究成果を公開し、今後の研究の基礎資料を提供すると同時に、この方面の研究の指針を明らかにする。本研究は、秋本吉郎による風土記観から脱却し、「二次的資料」というこれまでの評価を打破することにつとめたい。そこに本研究の学術的な特色と独創的な点がある。

3. 研究の方法

風土記に関する近世期の写本・版本の残存状況を書誌学的な研究方法を基礎におく。それに基づいて、国学者による逸文研究や古典籍注釈における風土記利用の実態を明らかにして風土記受容が、どの程度まで質的に深まっていたのかを、引用件数と引用内容によって明らかにする。このような視点は、これまでの風土記研究の方法にはなかった、本研究の独自の研究方法である。この方法は、我々の学術研究における論文引用回数の意義からヒントを得たものである。二次的資料という位置づけが果たして妥当であるかということ、引用回数という視点から検証しようというものである。この新たな研究方法の着想を得たところに本研究の独自性がある。

4. 研究成果

三年間にわたる研究の成果について、以下にその概要を記す。

まず、風土記写本・版本の残存状況について、研究責任である橋本雅之と5名の研究分担者がその調査をおこない写本目録を作成した。現在、それをデータベースとして公開することを目的として準備中である。

次に、古典注釈における古風土記引用状況とその意義について、橋本雅之は『古事記伝』に引用された風土記及び地誌について調査した。その結果、以下のような実態が明らかとなった。

本居宣長は『古事記伝』の中で、風土記をはじめとして多くの地誌類を引用して説話

や地理的記事を考証している。引用された風土記は二十八カ国、地誌は六カ国にのぼり、それを一覧にしてみると次のようになる。

A 風土記

(1) 古風土記(和銅官命による撰進)八カ国九資料 引用回数一四二回

常陸国風土記(六例)

出雲国風土記(七十九例)・出雲風土記抄(六例)

播磨国風土記(八例)

肥前国風土記(一例)

豊後国風土記(六例)

逸文 山城国風土記(十四例)

逸文 丹後国風土記(四例)

逸文 摂津国風土記(十八例)

(2) 日本惣国風土記等の後世風土記二十カ国二十資料 引用回数六九回

淡路国風土記(一例)・阿波国風土記

(三例)・伊賀国風土記(七例)

老岐国風土記(一例)・伊勢国風土記

(一例)・因幡国風土記(二例)

伊予国風土記(四例)・越後国風土記

(一例)・越前国風土記(一例)

相模国風土記(一例)・駿河国風土記

(五例)・筑後国風土記(六例)

筑前国風土記(七例)・筑紫国風土記

(三例)・土佐国風土記(十例)

伯耆国風土記(三例)・肥後国風土記

(五例)・日向国風土記(二例)

豊前国風土記(二例)・尾張国風土記(四例)

B 地誌 六資料 引用回数八九回

和泉志(七例)・蝦夷志(一例)・河内志(十四例)・山東志(一例)

山城志(三例)・大和志(六十三例)

以上のように、単純計算の上でも風土記・地誌の引用の中では、奈良時代に編纂された風土記の引用が圧倒的に多いことが分かる。その引用の実態をみていくと、史的・地誌的資料としてのみならず、神話・説話の解釈にまで及んでいる。今後の課題は、これを細かく分析することによって風土記引用の実態を解明することにある。

次に、兼岡理恵は、契沖の風土記利用について綿密に調査し、その結果以下のような結論を得た。

契沖(寛永一七～元禄一四 一六四〇～一七〇一)は、近世の古典研究の礎を築いた人物であるが、彼の風土記利用や風土記観はいかなるものか。それを明らかにすべく、『契沖全集』全一六卷(岩波書店版)における風土記関連記事の調査、また大阪府立中之島図書館所蔵契沖関係資料の調査を行った。その結果、『万葉代匠記』(初稿本・精撰本)以下、『勝地吐懐編』『和字正濫抄』など一四書、また契沖書入写本・版本の五本に、風土記引用、あるいは風土記に関する言及が見出せた。

まず契沖の代表的著作、『万葉代匠記』における風土記引用の特徴としては、多くが『万葉集注釈』『釈日本紀』からのものだが、精撰本において増加することが窺える。また『代匠記』が、元来下河辺長流に委託された事業ということもあり、長流著作からの風土記引用も多い。さらに初稿本では「おほよそ風土記は、養老年中より撰ばれたる書なるに、久しく世に絶て、見たる人なければ」（万葉集巻二・二二八番歌、『全集』1・六二〇頁）と、契沖自身はもとより、当時は風土記披見が困難であることを窺わせる記述があるが、精撰本・同条にはこうした言はない。この背景には、契沖が初稿本と精撰本の執筆の間一具体的には元禄二～三年頃一、実際に風土記を披見した可能性が想定される。事実、契沖が『出雲国風土記』を披見していることは、歌枕書『勝地吐懐編』で歌枕の比定に『出雲国風土記』を利用、また雑記帳的性格をもつ『雑々記』で、『出雲国風土記』数条を引用している点などから窺える。さらに『雑々記』では、風土記記事の語彙に対する考察なども為され、契沖の風土記への関心、ひいては風土記注釈の端緒として注目される。このように契沖は確かに風土記の資料的価値を認めており、それは、彼の弟子である今井似閑にも継承され、風土記逸文集成書『万葉緯』編纂に結実するとも言えよう。

次に、奥田俊博は鹿持雅澄の風土記受容について調査し、以下のような結論を得た。

江戸時代末期の土佐の国学者である鹿持雅澄の著作のうち、記紀・万葉集以外の古代の歌を収録して注釈を施した『南京遺響』（一八二一（文政四）年脱稿）、ならびに、従来の万葉研究の集大成と評価される『万葉集古義』（一八一八（文政元）年頃には、全二〇巻の注釈をひとまず脱稿したと推測される）を対象にして、風土記の受容のありようについて検討を行った。まず、風土記本文の出典については、出典が明記された引用以外については、基本的に先行する関連書や注釈書から引用されている。風土記逸文や『播磨国風土記』については、『釈日本紀』『万葉集注釈』『万葉代匠記』から引用されている。『播磨国風土記』以外の四国の風土記については、藩校である教授館の蔵書から引用されたものであろう。また、『南京遺響』については、風土記そのものを対象にした注釈書ではないが、風土記本文の校異、および歌謡の解釈において、現在においても参考にすべき施注が見える点が留意される。『万葉集古義』については、地名の説明や語義の説明のための引用が多いが、中には、風土記本文の解釈に踏み込んだ記載も見える。『万葉集古義』の一部や『南京遺響』に見られる風土記本文の解釈については、第二義的典籍という観点からのみでは説明しにくい。そこには、「総覧

的研究」と称すべき彼の研究姿勢が深く関わっている。以上の結果をふまえて報告をまとめたい。

本研究では、近世における風土記の資料的価値を調査してきたが、兼岡や奥田の報告からも明らかなように、江戸時代における風土記の役割は、考えられてきた以上に多彩である。特に、古典籍注釈における傍証としての引用回数という、これまであまり注目されてこなかった観点を導入して分析してみると、風土記が実に幅広く利用されていたことが分かる。そのような利用のあり方は、秋本吉郎が論じたような二次的資料といった捉え方だけでは把握しきれない。では、近世におけるこの資料の価値と受容のあり方の本質はいったいどのように考えればよいのか。

この科学研究費共同研究はそれを明らかにすることを目的としてきた。三年間の調査と考察を踏まえて現時点でそれを結論づけるならば、それは端的に言って歴史的史料と地誌的資料という二つの側面から評価できると思う。国文学者である秋本吉郎が、風土記が文学作品として万葉集や日本書紀に劣ると考えたのは、ある意味では当然かもしれないが、その考え方を江戸時代における受容のあり方に当てはめたところに問題があったと言わざるを得ないだろう。

古典籍注釈における風土記の引用のあり方は、文学作品としてではなくむしろ史的・地誌的資料としてなされたものであり、それはつまり風土記が史的・地誌的資料として受容されていたことを物語っている。近世における風土記の受容をこのように捉え直すならば、それはやはり独自の価値を持つ資料として認識されていたことは明らかであろう。その実態解明は今後も継続しておこなわなければならないが、三年間の挙動研究の結果、近世における風土記の受容史・研究史は見直さなければならない。風土記二次的資料説は書き換えねばならないというのが、この研究の最終報告である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

奥田俊博「『常陸国風土記』の漢語表現」（『和漢比較文学』44号、2010年、67～84頁）

〔学会発表〕（計1件）

「科学研究費研究調査報告シンポジウム」

一、日時 平成二十二年九月十一日午前十時～正午

二、場所 姫路市民会館小会議室

三、テーマ 「近世における風土記の受容」

四、報告者

橋本雅之・兼岡理恵・奥田俊博

五、報告内容

「近世における風土記受容の総合的研究」概要

橋本雅之

「契沖と風土記」

兼岡理恵

「鹿持雅澄における風土記の受容」

奥田俊博

〔図書〕(計1件)

調査報告書『近世における風土記受容の総合的研究』(橋本雅之・神田典城・飯泉健司・瀬間正之・兼岡理恵・奥田俊博、平成二十三年三月)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

準備中

6. 研究組織

(1)研究代表者

橋本雅之 (HASHIMOTO MASAYUKI)

皇學館大学・現代日本社会学部・教授

研究者番号: 70164796

(2)研究分担者

神田典城 (KANDA NORISIRO)

学習院女子大学・国際文化交流学部・教授

研究者番号: 50137882

飯泉健司 (IIZUMI KENZI)

埼玉大学・教育学部・准教授

研究者番号: 70277747

瀬間正之 (SEMA MASAYUKI)

上智大学・文学部・教授

研究者番号: 00187866

兼岡理恵 (KANEOKA RIE)

千葉大学・文学部・准教授

研究者番号: 70453735

奥田俊博 (OKUDA TOSHIHIRO)

九州女子大学・人間科学部・教授

研究者番号: 3034685

(3)連携研究者

なし ()

研究者番号: